

自著解説

資本主義の暴力

現代世界の破局を読む

齊藤日出治（大阪労働学校・アソシエ学長）

〈資本主義の暴力〉とは何か？

わたしは『資本主義の暴力』（藤原書店、2022年）で、資本主義の経済がはらむ暴力性を開示し、その暴力性の発動が社会と自然環境の破局をもたらしに至っていることを警告しました。ここでは、そのような「資本主義の暴力」がわたしたちの身近な日常生活で進行していることに目を向けると同時に、わたしたちがそこから脱する道筋を拓く社会闘



コンビニを頼りにして地域連携協定を結んでいきます。コンビニはそのような諸個人を社会的につなげる回路としての存在意義をますます高めています。こどもがはじめて社会的な経験するのはコンビニでお金を出してものを買うときだ、と言われるのはそのためです。

に、その日常性に向き合う
について考えてみます。

犯にも役立っし、災害時
には緊急の避難場所にな
ったり、非常食の入手もで
きる。そこはまるで二種の
公共空間のようになってい
ます。地方行政もその

けれど、コンビニのその
ような社会的役割が高
まれば高まるほど、こども
たちは地域のことも仲間
間やお年寄りとの交流を
しつ、他者とのつながる
経験を失っていく。市場
取引の豊かさは地域の共
同性の貧しさと背中合わ
せて進行しているのです。

コンビニの企業間取引が 組織する収奪の仕組み

また、市場取引は自由にチャージ料を要求しません。そこには、不平等で平等な取引関係によって発展するわけではあります。このチャージ料は、コンビニ店の売り上げ総額の40～70%にも上ります。

は、わたしたちの親密な生活圏における人間関係やコミュニティや社会的生活基盤（道路・上下水道・港湾・学校・図書館・公園など）や自然環境（海洋・河川・森林・大気・動植物など）が私的所有の対象となり商品として市

インターネットのような情報の共有空間が生み出されても、その共有空間はデジタル情報を私的に管理するプラットフォーム企業によって囲いこまれて、情報の共有空間が私益を肥やす道具にされていくのです。

コンビニ産業の発展と 地域社会の衰弱

コンビニは全国津々浦々に広がり、わたしたちの暮らしになくはならない存在になっています。コンビニに行けば日常生活に必要なものは手早く入手できるだけでなく、地域の名物や季節ごとの年中行事の品（正月料理、節分の豆など）が手軽に買えます。コンビニには深夜も明かりがとまり防

ことになります。コンビニ
産業はこのような経営方
式によつて発展していき
ますが、その過程で、コン
ビニのオーナーと労働者
は働きすぎや過酷な営
業と労働を強いられる。
《資本主義の暴力》はこの
ようにして発動されるの
です。

〈資本の暴力〉に抗する闘い

わたしたちはこのよう
を組織する、コンビニの労
を組織する、コンビニの労
を組織する、コンビニの労

暴力にどのように向き合つたらよいのでしょうか。このような支配従属関係をそのまま身をゆだねる、というようにです。

ねるのではなく、コンビニのオーナー、コンビニの労働者が企業間取引の関係を超えて、たがいにつながつて連帯し対抗する社会的なきずなを創造していくならば、わたしたちは「資本主義の暴力」から脱する道筋を拓くことができます。

そしてオーナーの事業協同組合が本部企業と対等な立場で経営条件の交渉をおこない、労働組合が集団的な労使交渉をおこなう。さらに、オーナーと労働者が地域の生活者とながつて、コンビニを地域の社会生活の再生産を組織する産業として再

たとえば、オーナー事業者が本部企業の垣根

関西生コン労組の闘い

このようなかたちで、
（資本主義の暴力）に抗して、社会のつながりを再創造するための闘いを組織してきた運動が実際にあるのです。関西生コンの労働運動がそれです。

支配する産業に挟まれることによつて、生コン産業は、不当に高価なセメントを買わされ、不当に安く生コンの販売を強いられます。セメントと生コンのこのような取引価格のた

生コンの製造はセメントを原料にしており、製造した生コンクリートは建設産業に販売されます。しかし、セメント産業と建設産業という大手資本が、企業間競争の圧力のなかで生コンの中小零細企業はセメント・建築産業の大手資本の従属下に置かれます。生コン企業で働く労働者は、この

企業間の支配従属関係を受けて過酷な長時間労働と低賃金での労働を余儀なくされます。これこそが「資本主義の暴力」が発動される仕組みにほかなりません。

動にもかかわってきまし
た。労働組合が粗悪な生
コンの製造やその不適切
な使用を監視するコンプ
ライアンス活動をおこな
い、生コンクリートの製
造技術の改善や都市環境

関西生コン支部の労働組合は、この資本主義の仕組みに対抗し挑戦する運動を組織してきました。生コンの中小零細企

やさしいコンクリート開発に取り組んだのです。

〈資本主義の暴力〉に抗して、労働者、経営者、都市生活者の市場取引

業を横断して労働者が産業単位でつながる産別労働組合を組織する。さらに、生コン産業の中小零細企業の経営者に協力して経営者を事業協同組合に組織し、セメントのは、このような組合支部は、二〇一八年から始まる関西生コン支部の大弾圧から新

共同受注、生コンの共同販売を実施し、その価格を適正に維持し、生コンの事業経営の安定化を図る。企業間の取引関係に労働者や中小企業経営者が介入し価格決定の主導権を握れば、(資本主義の暴力)に對抗することができ、関西生コン支

の(資本主義の暴力)に抗する闘いをちからづくで押しつぶそうとする策動でした。しかもそのなかからは、司法権力や警察権力だけでなく、市民社会(メディア、労働組合、協同組合など)も巻き込んだ総動員の攻撃として行われました。

部はこのことをよく理解していたのです。生コンの中小企業経営者の経営が安定すれば、生コン労働者は賃上げと労働時間短縮や有給休暇の取得などの労働条件の改善を図ることができるとです。

さらに関西生コン支部

しかし、裁判過程で多くの組合員が無罪判決を勝ち取り、弾圧の不当性が公認されつつあります。(資本主義の暴力)は、いまや社会秩序の崩壊をもたらすほどの極度な格差の拡大、気候崩壊や生態学的な危機など、(世

を超えたつながりを創造する。この間、資本主義とは異なるもうひとつの世界の創造に向けて希望の扉を開きました。関西生コンの労働運動は、そのようにして人びとの親密なつながりを大切にし、協働の暮らしを組織する

ことをみずからの課題として取り組まれてきたのです。

大弾圧から新しい世界の創造へ

二〇一八年から始まる
西生コン支部の大弾圧
界の終わり）を实感させ
るほどの深刻な事態を招
きつつあります。

人と人とのつながりや人と自然とのつながりをすべて市場の取引関係に回収しようとするちからが（資本主義の暴力）を招き寄せる。このちからから自己を解き放ち、市場の外部で社会と自然を自由に豊かに組織していくこと、社会と自

しかし裁判過程で多くの組合員が無罪判決勝ち取り、弾圧の不当が公認されつつありまゝ（資本主義の暴力）は、やがて社会秩序の崩壊をたらすほどの極度な格の拡大、気候崩壊や生態学的な危機など、（世

然のつながりを多様に多極的に創造する自由こそが、（世界の終わり）を新しい世界の創造へと変換する道を拓く、ということにわたしたちが気づくとき、世界は新しいすがたをとって立ちあらわれるのです。

【著者紹介】齊藤日出治(さいとうひではる)

1945年生まれ。名古屋大学大学院経済学研究博士課程満期退学。専門は社会経済学、現代思想。経済学博士。大阪産業大学経済学部教授、副学長を経て、大阪府労働学校・アソシ工学長に就任。